

学童における鼻アレルギーの調査研究

富山県農村医学研究会 豊田 文一
 金沢大学医療技術短期大学部 津田 光世
 金沢大学医学部耳鼻咽喉科学教室 宮崎 為夫

はじめに

私どもは昭和55年以来、7ヶ年にわたり石川県白峰地区5ヶ村の小学校、中学校の児童生徒の耳鼻咽喉科検診を行ない、その成績は、本誌に逐年的に発表してきた。(昭和56年度は検診不施行)この地は白山山麓にあり、狭隘な深い溪谷に平地を求めて散在し、過疎に悩む地帯である。古来白山杉として良質な木材を産出し、林業を主産業として生計の糧とし、僅かの平地の耕作により食糧の確保につとめていたといえる。

私どもは、この地の杉の開花時における花粉症に興味をもち、わが領域である鼻炎症との関連性につき、とくに鼻アレルギーについて調査研究を続けてきた。

今回過去7年間の成績を集計し、いささか検討を加えてみたいと思う。

検査成績

対象は、この地区の河内、鳥越、吉野谷、尾口、白峰の5小中学校児童生徒である。

なお鼻アレルギーと記載したものは臨床的にみた鼻腔所見と各人の訴える臨床症状とによって診断した。

その成績は次に示す。

第1表は小学校児童の鼻慢性炎症で、鼻炎は7.2%より4.5%の比率の間にあり、副鼻腔炎は2.9%より1.1%、鼻アレルギー4.4%より1.2%と年度によりバラツキがある。

中学校のそれを第2表に示す。

第1表 小学校児童の鼻慢性炎症

年度	病名	鼻炎	副鼻腔炎	鼻アレルギー	被検児童
		数	数	数	
55	数	47	19	9	646
	%	7.2	2.9	1.2	
57	数	39	16	14	650
	%	6.0	2.4	3.2	
58	数	35	7	26	571
	%	5.6	1.1	4.4	
59	数	41	13	26	596
	%	6.7	2.2	4.4	
60	数	35	11	19	590
	%	5.9	1.8	3.2	
61	数	26	13	14	571
	%	4.5	2.2	2.5	

第2表 中学校生徒の鼻慢性炎症

年度	病名	鼻炎	副鼻腔炎	鼻アレルギー	被検児童
		数	数	数	
55	数	7	4	6	319
	%	2.1	1.3	1.8	
57	数	39	16	14	329
	%	1.8	4.9	4.2	
58	数	6	7	10	329
	%	1.8	2.1	3.0	
59	数	12	4	5	325
	%	3.6	1.2	1.5	
60	数	7	0	9	326
	%	2.1	0	2.7	
61	数	11	1	6	313
	%	3.5	0.3	1.9	

鼻炎では11.8%より1.8%と年度により大きなバラツキ、副鼻腔炎では4.9%より皆無、鼻アレルギーでは4.2%より1.5%とバラツキが著明である。

なお単純な鼻、副鼻腔炎もアレルギー性を否定できず、その指標として分泌物細胞の好酸球の検出を行った。

その判定は、

各視野に多数の好酸球を認めるもの #
 毎視野に好酸球を認めるもの +
 数視野に好酸球を認めるもの ±
 好酸球を認めないもの -

とし、#、+は陽性、±、-は陰性と判定することにした。

第3表は小学校児童における鼻分泌物細胞の好酸球の比率で、その陽性率は72.7%より32.3%と年度により著しい差があり、また第4表に示す中学校の陽性率も72.2%より27.8%と年度により著しい差がある。しかも遂年的に上昇している傾向が認められる。

総 括

アレルギーは、異種物質、すなわち抗原が体内に侵入し、生体がこれに反応、抗原抗体反応により各種の臨床症状を呈し、各科領域において、それに相応する種々の疾患をひき起す。私ども耳鼻咽喉科領域において粘膜にこの症状を起し、その主たるものは鼻腔粘膜におけるものを主とする。すなわち鼻閉、水様性鼻漏、くしゃみや発作を主徴とする。その診断には血清学的に詳細な検索を要すべきであるが、学校における検診では、短時間に、多数の学童、生徒の診断を行うため、詳細な検索の余裕もなく分泌物細胞の好酸球の判定のみによざるをえなかった。ただ昭和60年度アレルギーテスト（スクラッチテスト）を行ない、ハウスダスト、スギ、カモガヤ、ヨモギを用い、その陽性率は916名中、陽性39名、6.3%であった。陽性者中ハウスダスト23名（59.0%）、スギ12名（30.8%）、カモガヤ、ヨ

第3表 小学校児童鼻分泌液の好酸球

年度	検査 程度	比率	被検者数
55	# +	41.0%	78
	± -	39.0%	
57	# +	32.3%	65
	± -	67.7%	
58	# +	50.7%	71
	± -	49.3%	
59	# +	56.5%	69
	± -	43.5%	
60	# +	64.1%	63
	± -	35.9%	
61	# +	72.7%	55
	± -	27.3%	

第4表 中学校生徒鼻分泌液の好酸球

年度	検査 程度	比率	被検者数
55	# +	27.8%	18
	± -	72.2%	
57	# +	29.4%	17
	± -	70.6%	
58	# +	36.4%	22
	± -	63.6%	
59	# +	36.7%	30
	± -	63.3%	
60	# +	53.4%	15
	± -	46.6%	
61	# +	72.2%	18
	± -	27.8%	

モギ各2名（5.1%）であり、とくにスギについて地球環境との関連性を思わせる。ことに59年度は春（5月）、秋（11月）の春秋2回、鼻腔炎症のみの検診を行ない、小学校においては春69名、秋55名、中学校においては20.3%、秋17名、すなわち小学校では20.3%、中学校では43.3%の著しい減少をみている。また好酸球の陽性率も小学校では春36.7%、秋23.5%、中学校では春36.7%、秋23.5%と激減している。

この事実は、春の鼻腔炎症の高率は花粉の飛

来と密接な関連性のあることが推測される。

結 語

私どもは昭和55年より石川県白峰地区小中学校の児童生徒の耳鼻咽喉科検診を行ない、とくに鼻アレルギーを中心として、その推移を観察した。その罹患状況は、年度により多

少の変動があったが、その比率に大きな相違をみなかった。ただ春期と秋期の罹患率をみると春期は秋期より罹患率が高い。このことは白峰地区の植蒼、とくに白山杉の植林による花粉の飛来に関連性をもつものではなかろうかと推測される。